

ギスベルト＝リンシェーデの巡礼研究について

小 田 匡 保

I. はじめに

巡礼 (pilgrimage)¹⁾は、宗教地理学研究の中では比較的扱われやすいテーマのひとつである²⁾。たとえば、日本国内の巡礼については、田中博³⁾・田中智彦⁴⁾・島津⁵⁾・小野寺⁶⁾・岩鼻⁷⁾らの研究があり、筆者もかつてこれを論じたことがある⁸⁾。また海外でも、バードワジ (Bhardwaj)⁹⁾、ノラン・ノラン (Nolan and Nolan)¹⁰⁾、バードワジ・リンシェーデ (Bhardwaj and Rinschede)¹¹⁾らの著作を初めとして、これまでいくつかの研究成果が発表されてきている。本稿では、その著者のひとりで、宗教地理学叢書“Geographia Religionum”の一編集者としても現在精力的に活動中のギスベルト＝リンシェーデ (Gisbert Rinschede) をとりあげ、彼の巡礼研究について、特に研究の観点に重点を置きながら紹介することにしたい。

最初に、リンシェーデの略歴について簡単に触れておく¹²⁾。1941年、ミュンスター南東のリップシュタット (Lippstadt) 郡の生まれ。1974年にミュンスターで博士号をとり、1981年に同じくミュンスターで大学教員資格 (Habilitation) を取得。1982年、バイエルン州インゴルシュタット北西の小さな町アイヒシュテット (Eichstätt) にあるアイヒシュテット＝カトリック大学の教授となり、1989年、さらにレーゲンスブルク大学に移っている。現在は同大学地理学教室地理教育 (Didaktik der Geographie) 講座の正教授である。博士論文ではピレネーの、大学教員資格論文はアメリカの移牧を扱ったというが、その後巡礼についての研究を開始したようである。

II. 巡礼研究の枠組み

巡礼に関するリンシェーデの主要な著作は、表1の通りである。編著の序文的なもの、宗教地理学一般に関するものを除き¹³⁾、1985年から現在まで11本の巡礼関係論文が数えられる。ただし、類似の内容を英語とドイツ語の両方で発表したり、地理教育雑誌用に要約して書いたりしているため、実質的には彼の研究テーマは五つにまとめられる。すなわち、(1)巡礼研究の枠組み・方法論、(2)ルルド、(3)ファティマ、(4)アメリカ、(5)宗教ツーリズムである。

リンシェーデが巡礼研究の枠組み・方法論をテーマにして書いているのは、論文1および11である (論文4もこれに関するものであろうが未見)。本章では、二つの論文それぞれに一節をあて、その内容を詳しく見ておくことにしたい。

表1 巡礼に関するリンシェーデの主要著作一覧（年代順）

Table 1. List of main papers by G. Rinschede concerning pilgrimage in chronological order

-
1. Rinschede, G. und Sievers, A., 'Das Pilgerphänomen in sozialgeographischen Untersuchungen' (Büttner, M. et. al. hrsg., *Grundfragen der Religionsgeographie (Geographia Religionum 1)*, Dietrich Reimer Verlag, 1985), S.183-193.
 2. Rinschede, G., 'Das Pilgerzentrum Lourdes' (Büttner, M. et al. hrsg., *Grundfragen der Religionsgeographie (Geographia Religionum 1)*, Dietrich Reimer Verlag, 1985), S.195-256.
 3. Rinschede, G., 'The Pilgrimage Town of Lourdes,' *Journal of Cultural Geography* 7-1, 1986, pp.21-34.
 4. Rinschede, G. and Sievers, A., 'The Pilgrimage Phenomenon in socio-geographical Research,' *National Geographical Journal of India* 33-3, 1987, pp.213-217. (not seen)
 5. Rinschede, G., 'The Pilgrimage Center of Fátima/Portugal' (Bhardwaj, S. M. and Rinschede, G. eds., *Pilgrimage in World Religions (Geographia Religionum 4)*, Dietrich Reimer Verlag, 1988), pp.65-98.
 6. Rinschede, G., 'Pilgerzentrum Lourdes; Ein Beispiel raumwirksamer Tätigkeit von Pilgergruppen,' *Praxis Geographie* 19-9, 1989, S.14-18.
 7. Rinschede, G., 'Religionstourismus,' *Geographische Rundschau* 42-1, 1990, S.14-20.
 8. Rinschede, G., 'Catholic Pilgrimage Places in the United States' (Rinschede, G. and Bhardwaj, S.M. eds., *Pilgrimage in the United States (Geographia Religionum 5)*, Dietrich Reimer Verlag, 1990), pp.63-135.
 9. Rinschede, G., 'Forms of Religious Tourism,' *Annals of Tourism Research* 19-1, 1992, pp.51-67.
 10. Rinschede, G., 'Pilgerzentrum Fátima/Portugal; Pilger prägen Räume,' *Geographie heute* 106-13, 1992, S.15-22.
 11. Rinschede, G., 'Guidelines for Pilgrimage Studies at Different Scales.'*
-

* 1991年4月に著者より入手したもののだが、内容から判断して、1988年～1991年の間に、どこかの学会で読まれたペーパーだと思われる。

(1) 宗教地理学・社会地理学としての巡礼研究

スリランカ研究で著名なズィーフェルス (Sievers) との共著になる論文1は、「巡礼の社会地理学的研究」(独文)と題される。時間的にはいちばん早く1985年に発表されたものだが、その後の事例研究に見られる研究の観点のほとんどは、既にここでうちだされている。

VII章構成中のI章では、巡礼現象の宗教地理学的・社会地理学的位置づけが行なわれる。まず、巡礼現象は空間的次元を持つこと、つまり巡礼集団が地理的空間を形成することを述べ、そこに巡礼研究の宗教地理学的意義があるとする。次いで、デフォンテーヌ (Deffontaines) 以来の主な巡礼研究について触れるが、デフォンテーヌを初めとして、巡礼者自身や種々の社会集団が重視されてこなかったことを指摘する。そして、巡礼の形相的・可視的側面の記述は現在最重要の課題ではないとし、宗教集団の種々の活動に焦点を当てた社会地理学的考察の重要性を説く。それによって、デフォンテーヌ以来の地理学的巡礼研究に、全く新しい方向性を示すことができるのだという。

リンシェーデらによれば、同じ「自然的生活単位」に属する巡礼者は、空間的に作用する社会集団 (raumwirksame Sozialgruppe) であり、巡礼現象の核心部分はその社会地理学的性格のものである。そして、これら社会地理学的行動集団 (Verhaltensgruppe) の中に、様々な行為空間的諸集団 (aktionsräumliche Gruppe) も発生し、それがまた様々な行為空間 (Aktionsraum)——巡礼地の信仰圏 (Einzugsbereich), 巡礼観光客 (Pilgertourist) の小旅行圏など——を形成するとする¹⁴⁾。

次いでⅡ章では、巡礼が、宗教と環境の相互作用関係の中でとらえられることを述べる。すなわち、一方では、巡礼者の宗教活動によって地理的環境が形成される。巡礼者の精神態度 (Geisteshaltung) が、空間的に作用する諸活動を通じて、様々な地物を生じさせるという訳である。他方、環境 (自然環境と社会環境) もまた、本来巡礼者の精神態度に作用するものであり、さらに上述の精神態度による形成作用へのフィードバックとして、違った形でまた精神態度に影響する。その精神の変化がさらに地物の形相的变化として現われるというように、巡礼は宗教と環境の相互作用関係の中で発展 (衰退) していくのである。そして、地理学は、(社会空間を含めて) 空間的に把握できる指標 (礼拝所など) を研究することが緊急の課題であると述べる。他方、宗教学の課題は、まず巡礼者の精神態度 (宗教) を研究し、そしてそこに見られる環境の影響を分析することとする。この章の議論は、注記されている通り、ビュットナー (Büttner) の論点¹⁵⁾を受け継いだような格好になっているが、宗教と環境の関係論自体は長い伝統を持っている¹⁶⁾。

Ⅲ章は、「巡礼」の語の概念規定を行なっている。これは、ドイツ語に「巡礼者」を意味する言葉が、'Pilger' と 'Wallfahrer' の二つあることから生じる問題である (当然「巡礼行」を意味する言葉も、それぞれに対応して、'Pilgerfahrt' と 'Wallfahrt' の二つある)。他の言語においては、英語では 'pilgrim'¹⁷⁾、フランス語では 'pèlerin'、イタリア語では 'pellegrino' と、ラテン語の 'peregrinus' に由来する「巡礼者」の語がひとつあるだけである。'Pilger' と 'Wallfahrer' はしばしば同義語として使われ、神学や地理学の辞典には 'Wallfahrer' 系の語のみが見出し語として登場するという。リンシェーデらは 'Pilgerfahrt' を、グリムの辞典に依って、一生に一度あるいはまれにしか行なわれない、遠く離れた大きい巡礼地 (エルサレム・ローマ・メッカなど) への巡礼で、数日間、かつては数カ月・数年かかったものとする。他方 'Wallfahrt' については、聖人の祝祭日に定期的に行なわれる、近在の巡礼地への巡礼で、宿泊を伴わず、1日で終わるとする。しかし、'Wallfahrt' の概念はドイツ語地域以外では使われないので、国際的な出版物では 'Pilger', 'Pilgerfahrt' 概念を用いるべきと述べている。

Ⅳ章では、巡礼 (Pilgerverkehr) も旅行 (Fremdenverkehr) のひとつということで、巡礼と保養 (Erholungsverkehr) とが比較考察される。両者の共通点としては季節性・経済的意義・超地域的結合などが、相違点としては動機・目的、旅行者の活動があげられる。さらに、訪問地の施設についても違いが生じることが指摘される。ただし、工業国の巡礼地やその周辺では、数多くの観光活動とそれに対応する施設が見られ、その限りにおいては、巡礼者の大部分は観光客つまり巡

礼観光客でもあると述べる。もっとも、歴史的に見れば、巡礼は同時に余暇旅行でもあったのであり、巡礼観光 (Pilgertourismus) はいつの時代にもあったとする。

V章は、巡礼の宗教地理学的観点を列挙する。まず、1959年のボーベック (Bobek) 論文以降、社会地理学的考察方法がドイツ地理学に出現し、現代の宗教地理学に決定的な影響を与えたこと、フィッケラー (Fickeler) の言う祭儀景観的観点に代わって、オトレンバ (Otremba) の言う集団の形成力という見方が前面に出てきたことが述べられる。このような一般的考え方、すなわち社会集団の空間的に作用する活動を記述するという立場から、次のような巡礼の観点が提示される。手始めは①場所的・空間的に存在する諸現象であり、次に問われるのが、②そのような空間的諸現象を生じせしめた社会集団 (巡礼者数、巡礼者の諸類型、巡礼者の出身地、社会構造、巡礼交通) である。巡礼者の諸類型には、集団の規模によるものと動機によるものだが、また巡礼交通としては、巡礼の時期 (季節性)、交通手段、交通路、頻度があがっている。社会集団に続いて、さらに、③巡礼集団によって形成された諸現象 (礼拝所・信仰用具店など) の空間的配置と個々の要素の機能的諸関係 (巡礼地の機能的区分を含む)、④歴史的・将来的な時空変化 (人口・都市・集落の発展、②と③の変化)、⑤行為空間的諸側面 (行為到達範囲、様々な行為空間、行為空間的諸集団)、⑥地域的・超地域的枠組みの中への巡礼の位置づけが、巡礼の着眼点として列挙される。本章の論点が、I章で示された巡礼の位置づけを背景としていることは、明らかであろう。

VI章は、フィールド研究を進める手順についてである。まず、事例とする巡礼の宗教的背景・宗教的行動様式・言語について、豊富な知識が前提とされることを述べる。その知識から、巡礼者の空間的諸活動に関する問題提起と作業仮説の設定が始まり、さらに資料収集と仮説検証が続く。その作業方法としては、インタビュー・計数・地図化・文献研究があげられている。資料と成果の記述に際しては、上述V章の観点に応じた論文構成にし、補完的な記述手段として、写真とならんで、グラフィックな表現が望ましいとする。

VII章では、巡礼にミクロとマクロの事例研究のあることが述べられる。すなわち、個別の巡礼地 (Pilgerzentrum) を対象とするものと、数多くの巡礼地 (Pilgerort) および (または) 複数の宗教を持つ大きな地域を対象とするものである。そして、ミクロ事例研究の例としてルルド、マクロ事例研究の例としてスリランカの様子が略述される。

(2) 巡礼研究の四つのレベル

「様々なスケールにおける巡礼研究の指針」(英文) と題された論文11は、巡礼の地理学的な諸側面が、四つのレベルとスケールで研究できることを示している。つまり、A. 単一の巡礼の地理学的研究 (ミクロ事例研究)、B. 特定の国・文化地域における巡礼の比較地理学的研究 (メゾ事例研究)、C. 一般的・世界的見地から見た巡礼の地理学的研究 (マクロ研究)、D. 巡礼の総合的・学際的研究 (混合研究) の四つである。この構成は、上述した論文1-VII章の内容を展開させたものと見ることができよう。

まず、A. 単一の巡礼の地理学的研究として書かれている内容は、論文1のV章を発展させたものである。ただし、研究の出発点としてあがるのは、論文1-V章の①にあった「空間的諸現象」ではなく、奇跡のような宗教的諸事象の考察である。これは、後述するファティマ論文（論文5・10）などに見られる関心と一致している。

次に、巡礼者の社会集団が、以下のような点で分析されるべきとする（論文1-V章の②に対応）。すなわち、巡礼の動機、巡礼者数、巡礼の季節性、巡礼の頻度、巡礼者の出身地、交通手段、巡礼ルート、巡礼集団の社会構造（男女別・年齢別・職業別構成）、民族集団などである。巡礼の動機については、本当の（典型的）巡礼者、巡礼観光客、普通の観光客に区別できると述べるが、これは論文1では、巡礼者の諸類型に含まれている。また、季節性・頻度・交通手段・巡礼ルートの四つは、論文1では、巡礼交通としてまとめられている。論文1にはなかった目新しいものとして、民族集団がある。これは、1986年以降調査を始めたアメリカの巡礼地の多くが、特定の民族集団と結びついていることを念頭に置いての記述であろうが、その詳細は論文8に書かれている。さらに、巡礼者の出身地について、論文1では国籍と地域的到達範囲の二つの観点しかなかったのが、論文11では、局地的（local）・地域的（regional）・上部地域的（supra-regional）・国家的（national）・国際的（international）という巡礼地の信仰圏（catchment area）の話に展開している。信仰圏の話は、後のBでまた登場する。

第三に、巡礼集団の空間的影響が最も重要な地理学的側面だと述べ、具体的には、巡礼地における人口・集落・経済の発展をあげる（論文1-V章の③と④に対応）。とりわけ重要なものが経済構造への影響であり、その理由として、ホテル・レストラン・信仰用具店が発達することを述べる。

第四に、巡礼者の活動空間（activity space）がとりあげられ（論文1-V章の⑤に対応）、様々な巡礼集団の活動空間が区別できると述べる。論文1の「行為空間」が、論文11では「活動空間」と表現されていることに気がつくが、他の論文を見ると、彼はドイツ語の‘Aktionsraum’の英訳として‘activity space’を用いているようである。

B. 特定の国・文化地域における巡礼の比較地理学的研究では、まず第一に、すべての巡礼地が宗教現象（たとえば崇拜対象）によって分類されるべきだとし、また一般的に、ある国や文化地域における巡礼地の分類は、先述の信仰圏（局地的・地域的・上部地域的・国家的・国際的）を基準にして行なうことが可能だと述べる¹⁸⁾。その他、民族的な影響の違いも巡礼地の分類に有効であるとする。地域間比較の面では、人口・集落・経済に対する巡礼者の影響の点で、ヨーロッパとアメリカの巡礼地が異なることを指摘する。また、巡礼者の活動空間において、巡礼地が相互に結合していることに言及する。本章は、論文1のVII章ではスリランカを想定して書かれているが、アメリカでの調査を経て書かれた本論文では、かなりそれを意識した内容になっている。

C. 一般的・世界的見地から見た巡礼の地理学的研究では、巡礼地の分布・立地や、来訪者数に基づく巡礼地のランキングに触れる。また、来訪者数だけでなく、文献・学者による評価を考慮して、巡礼地の重要度を測定しようとしたストッダード（Stoddard）の試みを紹介している。

D. 巡礼の総合的・学際的研究では、地理学者は巡礼者による環境への影響（特に人口・集落・流通・経済の発展）を論じ、環境が巡礼者の宗教信念・宗教活動に与える影響は扱わないという、古くからの議論が繰り返される。そして、これらの側面を解明するために、宗教学など他の学問が必要とされると述べている。

以上、二つの論文の内容をざっと見てくると、論文1-V章と論文11-Aで重ねて力説される次のような巡礼研究の観点が浮かび上がってこよう。すなわち、巡礼集団とその空間的影響、さらに巡礼者の行為空間（活動空間）である。このことは、彼の事例研究を見ることによって、より明瞭になる。

Ⅲ. 巡礼の事例研究

Ⅱ章で紹介してきた、巡礼研究の枠組みに関する論文の他に、リンシェーデはいくつかの事例研究論文を書いている。事例研究のフィールドとしてとりあげられているのは、ルルド・ファティマとアメリカである¹⁹⁾。本章では、それぞれの事例地ごとに、研究の概要を見ていくことにしたい。

(1) ルルド

まず、三つの中ではいちばん調査の早い²⁰⁾と思われるフランスのルルド (Lourdes) について見ておく。関係論文は、論文2・3・6である。論文2「巡礼地ルルド」(独文)は、1985年に論文1と同じ書物に掲載されたもので、論文1(特にV章)と同じ関心が読み取れる。その構成は、①序論と問題提起、②巡礼地ルルドの空間的諸現象、③作用集団としての巡礼者(巡礼者数と類型、出身地、季節性、社会構造、交通手段)、④人口・都市の発展に対する巡礼者の影響(人口の発展、都市の発展)、⑤様々な構造的諸要素の発生と空間的配置に対する巡礼者の影響(宗教的場所、宿泊・レストラン業、信仰用具販売業、旅行社と巡礼者の観光活動)、⑥結びとなっている。①では、この研究の課題として、社会集団の宗教活動による空間形成の問題と、機能的諸関係の説明とをあげる。②は空間的に見たルルドの概要で、ルルドを機能区分した地図が早速提示される。量的には短いものである。③は地図・グラフを多用して、巡礼者の諸側面を明らかにしている。本論文の半分近くの分量を占めており、読みごたえがある。短い④をはさんで、⑤はまた量が多い。ここでは、巡礼集団によって惹起された個々の要素を、一次的なものとの二次的なものとの区別している。宗教的場所は、行為空間の一次的構造要素であり、二次的要素には、宿泊場所・レストランなどが含まれる。目を引くのは、ホテルや信仰用具店などの分布図であり、またそれと関連して作成された、巡礼者の時間的・空間的移動を表す図である。本論文の図の数は非常に多く、全部で38枚もある(表は4枚)。最後の⑥では、まとめとして、巡礼集団の行為到達範囲によって決定される、三つの行為空間が提示される。ひとつめは、巡礼者(特に組織化された大集団)によって形成される核心空間で、洞窟付近(マリア出現の場所、泉、バシリカなど)と宿泊業・信仰用具販売業を伴う一

帯である。二つめは、移動性の高い巡礼者と個人巡礼者（特にキャンパー）によって形成される行為空間であり、より大きな到達範囲を持つ。核心空間に加えて、それ以外の都市地域の部分（特に商業中心地とレクリエーション地帯）が含まれる。第三の行為空間は、巡礼者が自家用車や観光バスの小旅行に加わることに生じ、はるかに拡大された到達範囲を持つ。これは、ルルドの周囲から、ピレネー山脈にまで続いている。そして、このような巡礼地を観光地と比較し、共通点と相違点をあげる。最後に、ルルドはけっして特殊な事例ではなく、すべての巡礼地（Pilgerzentrum）に共通するのは、宗教的建造物と宿泊場所、それに部分的には信仰用具店であると締めくくる。

ルルドに関する二つめの論考である論文3「巡礼都市ルルド」（英文）も、①前書き、②ルルドにおける空間的諸現象、③行動集団（action group）としての巡礼者、④ルルドの発展に対する巡礼者の影響、⑤構造的諸要素に対する巡礼者の影響、⑥結びというように、論文2と同じ構成である。内容も論文2を要約した形で、図表は同一のものが抜粋されて使われている。論文2を簡略化して、英語で発表したものと見てよいであろう。

第三のルルド関係論文である論文6「巡礼地ルルド——巡礼集団の空間的に作用する活動の一例」（独文）は、地理教育雑誌²¹⁾に書かれた短いものである。構成は、①宗教的諸事象、②巡礼者（巡礼者数・出身地・季節性・交通手段）、③人口・都市の発展に対する巡礼者の影響、④都市・経済の構造に対する巡礼者の影響（宗教的場所、宿泊・レストラン業、信仰用具販売業、旅行社と観光活動）、⑤結びとなっている。前述2論文と比べると、①が「空間的諸現象」から「宗教的諸事象」に入れ替わっていること、④の名称が若干変わっていることに気がつく。ただし、④の中身は以前と同じであり、①も短い導入部分で、よく知られている1858年のマリア出現のこと、それ以来現在まで奇跡が何度も起こっていることが記されているだけである。三つの行為空間を提示する⑤の結びは相変わらずであり、全体の内容は、従来のルルド論文と同じ論旨で書かれたものとしてできる。なお、図は若干手が加えられており、1987年の新しいデータ（月別巡礼者数）も入っている。ルルドの地図も新しく書き直されているが、図の出典に注記されているように、リンシェーデ作成の同じ図が、ディルケのアトラス（1988年版）に掲載されている²²⁾。

以上三つの論文を比較してみると、ルルドに関するリンシェーデの研究は、最初の論文2に集約されることが分かる。そして、彼が重点を置いているのが、II章の章末で述べたように、社会集団としての巡礼者の分析、その巡礼者が人口・都市や巡礼地の構成要素に及ぼす影響の叙述、それに巡礼者の行為空間の確認であることも理解されよう。

(2) ファティマ

ルルドとともに、個別の巡礼地の事例としてとりあげられているのが、ポルトガルのファティマ（Fátima）である。関係する論文は、1988年の論文5と1992年の論文10であり、ルルドの後に調査を始めたものと思われる。論文5「巡礼地ファティマ」（英文）は、7章からなる。すなわち、

①序論・方法論, ②ファティマ発生時における宗教的諸事象, ③巡礼者の特徴(巡礼者数と類型, 出身地, 季節性, 交通手段), ④人口・集落の発展に対する巡礼者の影響, ⑤土地利用パターンに対する巡礼者の影響(宗教的場所・レストラン・宿泊施設・信仰用具店), ⑥巡礼観光客の観光活動と活動空間, ⑦結びである。①と②は前置き程度であり, 1916年から1917年にかけて, 天使やマリアが出現したことが述べられる。内容が豊富なのは③巡礼者の章である。ルルドの場合と同様, 現地で集計してある統計をもとに, 地図・グラフを多用して, 巡礼者の特徴を記述している。ちなみに, 本論文には21枚の図が含まれる(表は1枚)。④と⑤では, 巡礼者のもたらした様々な影響が, やはり図を使って説明される。⑥では, ファティマの来訪者を, 巡礼者(pilgrim)・巡礼観光客(pilgrim-tourist)・観光客(tourist)に分け, 三者の活動空間, とりわけ巡礼観光客の活動空間について述べる。このような分類が論文1・11であげられていることは, 既述の通りである。⑦結びでは, 他の巡礼地の例も出しながら, 巡礼地の発展と巡礼観光との関わりに言及している。

もうひとつのファティマ論文である論文10「巡礼地ファティマ/ポルトガル——巡礼者は空間を作る」(独文)は, 上記論文5を地理教育雑誌²³⁾用に短くリライトしたものと思われる。構成は論文5とほぼ同様で, ①宗教的諸事象, ②巡礼者, ③人口・集落の発展に対する巡礼者の影響, ④集落・経済の構造に対する巡礼者の影響, ⑤観光活動という構成になっている。体裁のうえで目につくのは, 写真が3枚入ったことで, その他, 図も論文5と論文7のものに一部手を加えて掲載されている。

以上のファティマ論文をルルド論文と比較して, 構成の点で気がつくのは, ルルド論文2と3にあった「空間的諸現象」の章が欠けており, 代わって論文6にあった「宗教的諸事象」の章が, 両ファティマ論文に見られることである。しかしながら, より重要なのは, ルルド論文では「構造的諸要素に対する巡礼者の影響」の章や「結び」に含まれていた「観光活動」や「活動空間」が, ファティマ論文ではひとつの章をなしていることである。これは, それだけリンシェーデが, 巡礼者(巡礼観光客)の行為空間や, 巡礼とツーリズムとの関係を重視するようになったことの現われと見てよいであろう。ただし, ファティマ自体は, 巡礼観光客よりも純粹の巡礼者の方が多いい巡礼地であると, リンシェーデが述べていることも付記しておかねばならない。

(3) アメリカ

上述してきたルルドとファティマの研究が単一の巡礼地に焦点を当てたものであるのに対し, 三つめにとりあげるアメリカの研究は, 一国全体の(カトリック)巡礼地を対象とするものである。II章(2)節で紹介した論文11の分類で言えば, 前者がAのマイクロ事例研究, 後者がBのメゾ事例研究ということになる。関係論文である論文8(1990年)の記述によれば, 調査期間は1986年から足掛け4年, 延べ4ヵ月で, 確認された126の巡礼地のうち65ヵ所もの巡礼地を訪れている。

論文8「アメリカ合衆国におけるカトリック巡礼地」(英文)の構成は, 次の通りである。①序論, ②巡礼地の数と分布(数, 分布), ③社会地理学的行動集団としての巡礼者(巡礼の動機, 巡

礼者数、類型、出身地、季節性、交通手段と組織形態、巡礼者のエスニシティ)、④巡礼地(巡礼地の起源と成立時期、巡礼地における崇拜対象、巡礼地の大きさ・構造・施設、巡礼地の立地、巡礼地の管理、巡礼地の機能と義務、巡礼地と環境、巡礼地の諸類型)、⑤巡礼活動の空間的側面(巡礼地での活動、巡礼ツアーにおける巡礼者の活動空間、巡礼観光客の活動)、⑥アメリカにおける巡礼現象の今後の展開である。全部で73頁(図は27枚)にわたる長いもので、アメリカ全域のカトリック巡礼地について、その特徴を多岐にわたりよくまとめている。中身をもう少し詳しく見ていくと、①ではアメリカの巡礼地がこれまで地理学や他の学問分野からほとんど注目されてこなかったことを指摘し、研究目標を巡礼地の空間的諸次元の研究に置いている。②では、アメリカに全部で126の巡礼地が存在し、特に北東部(ニューイングランド)と中西部に集中していることを述べる。③は従来通り巡礼者の諸側面を分析したものだが、目新しいのはエスニシティの問題である。これは、アメリカのほとんどすべての巡礼地が何らかの民族集団と結びついていることによる。④では、ヨーロッパの巡礼地と様々な点で異なるアメリカの巡礼地の特徴について述べている。たとえば、ヨーロッパの巡礼地の起源は、その多くがマリアの出現や奇跡の発生にあるのに対し、アメリカでは約半数の巡礼地が、ヨーロッパ・中米から礼拝対象を写して成立したものであるという。そして、④の最後で、アメリカの巡礼地はマリア巡礼地であり、エキュメニカルな性格を持ち、20世紀に教団によって創立され、少なくとも初期には大都市周辺部に立地し、広大な敷地と豊富な施設を所有し、地域的信仰圏を持ち、夏季1~10万人の民族的特色のある巡礼者が訪れるなど、その特徴を10項目にまとめている。その中で、ルルド・ファティマとの比較のうえで特に重要なのは、集落・経済の発展にほとんど影響を与えていないという点であろう。⑤では、巡礼地に関わる活動空間を、巡礼地における活動空間、巡礼ツアーにおける巡礼者の活動空間、巡礼観光客の活動空間の三つに分類して説明している。巡礼ツアーとは、同時に複数の巡礼地を巡るものを言い、巡礼地の分布状況の関係から、アメリカ東部に多く見られるという。また、アメリカの巡礼が純粹に精神的な行為ではなく、レクリエーション・観光的要素を有していることを指摘している。⑥は短いまとめで、巡礼地の今後の展開には、レクリエーションとの関わりやエスニシティの問題が重要であると述べる。

アメリカの巡礼地研究をルルド・ファティマ研究と比べてみると、③巡礼者と⑤その活動空間の分析・記述がそれぞれ一章をなす点はファティマ論文と同じであるが、それ以上に目につくのは両研究の違いである。もちろん、アメリカ論文で②巡礼地の数と分布の章が挿入されているのは、フィールドのレベルが違うことによるのであるが、重要なのは、ルルド・ファティマ論文に見られた、人口・集落・土地利用などに対する巡礼者の影響の章二つが消えてしまい、④巡礼地の章に埋没していることである(「宗教的諸事象」の内容も④章に含まれる)。これは、リンシェーデの研究関心の変化というよりも、ヨーロッパとアメリカというフィールドの違いが素直に現われたと見るべきであり、民族集団の問題もそのひとつである。ここでは、「巡礼(集団)→空間」というリンシェーデの思考回路が、対象の持つ特性によって、脇に押しやられたような観がある。その他に、

巡礼地の立地・管理・機能といった、新しい関心と言ってよい事項も登場する。

IV. おわりに

以上紹介してきたものの他に、リンシェーデには宗教ツーリズム (Religionstourismus, religious tourism) 一般に関する論文がある (論文7・9)。宗教ツーリズムとは、彼によれば、宗教的に動機づけられたツーリズムを言い、いわゆる巡礼以外に式典や宗教会議への参加をも含むが、中心はやはり巡礼である。論文7 (独文)²⁴⁾では、①宗教ツーリズムを滞在期間によって短期と長期に分け、次に、②宗教ツーリズムの諸形態を、参加者数・交通手段・季節性・社会構造の諸側面から述べる。さらに、③人口・集落・経済の発展に対する影響をあげ、最後に④他種のツーリズムとの結びつきを言う。論文9 (英文)²⁵⁾は、論文7に手を加えて詳述したものである。①序論には論文7の④の内容が入り、②本論では、世界の巡礼の分布と歴史的展開を概観した後、論文7の①、②、③が来る。③結論は、アメリカの論文8-⑥の一部も使って、宗教ツーリズムの今後についてまとめている。いずれも、上述した自身の研究成果に、文献からの引用を加えて構成しており、類似のツーリズムとの関係を言いはするものの、とりたてて目新しい研究方向はうちだされていない²⁶⁾。ルルド・ファティマなどの研究が巡礼の個別研究とすれば、これは巡礼の概説と呼ぶことができよう。

本稿ではリンシェーデの巡礼研究を五つに分け、それらの内容を、特に研究の観点に焦点を当てながら紹介してきた。論文執筆時期・フィールドによって多少の差異はあれ、巡礼を社会地理学的現象と見なし、(1)巡礼集団、(2)巡礼者が人口・集落・経済などに及ぼす影響、(3)巡礼者 (巡礼観光客) の行為空間を重視する彼の基本姿勢が、ある程度明らかになったものと思う。日本の巡礼研究は、地理学の側からはこれまで主に歴史地理学的視点から行なわれてきた²⁷⁾。社会地理学的背景を持つリンシェーデの巡礼研究は、歴史時代の巡礼のみならず、現代の巡礼を考察の対象とするうえでも、示唆するところが多いことを最後に指摘しておく。本稿で行ないえなかった彼の所論の批判的検討や巡礼地の具体的事実の紹介は、別の機会を期すことにしたい。

Acknowledgment

The author would like to thank Gisbert Rinschede for supplying much research material.

注

- 1) 「巡礼」の語は、日本では、四国88ヵ所・西国33ヵ所のような複数の聖地に詣でる行動に対してのみ使われ、伊勢・成田などの場合は「参詣」と呼ぶ傾向にあるが、本稿ではこれら両方の意味を含めて「巡礼」の語を用いる。「巡礼」も「参詣」も、英語に翻訳すれば 'pilgrimage' であり、本稿で言う「巡礼」とは 'pilgrimage' のことである。
- 2) 松井は、従来の日本の宗教地理学研究を、研究対象の点から四つに分類しているが、巡礼はそのひとつとなっている。松井圭介「日本における宗教地理学の展開」, 人文地理45-5, 1993, 75-93頁。

- 3) ①Tanaka, H., 'Geographic Expression of Buddhist Pilgrim Places on Shikoku Island, Japan,' *The Canadian Geographer* 21-2, 1977, pp.111-132. ②Tanaka, H., 'The Evolution of a Pilgrimage as a Spatial-Symbolic System,' *The Canadian Geographer* 25-3, 1981, pp.240-251. ③田中博『巡礼地の世界』, 古今書院, 1983など。
- 4) ①田中智彦「愛宕越えと東国の巡礼者-西国巡礼路の復元」, 人文地理39-6, 1987, 66-79頁。
②田中智彦「大坂廻りと東国の巡礼者-西国巡礼路の復元」, 歴史地理学142, 1988, 1-16頁など多数。
- 5) 島津俊之「奈良東山中「新西国三十三所」と村落間結合」, 歴史地理学151, 1990, 1-15頁。
- 6) 小野寺淳「道中日記にみる伊勢参宮ルートの変遷-関東地方からの場合」, 人文地理学研究14, 1990, 231-255頁など。
- 7) ①岩鼻通明「道中記にみる出羽三山参詣の旅」, 歴史地理学139, 1987, 1-14頁。②岩鼻通明『出羽三山信仰の歴史地理学的研究』, 名著出版, 1992, 第四章など。なお, ②に対する筆者の評は, ③小田匡保「山岳宗教研究の地理学的諸問題」, 駒澤地理29, 1993, 135-153頁を参照のこと。
- 8) ①小田匡保「小豆島における写し霊場の成立」, 人文地理36-4, 1984, 59-73頁。②小田匡保「巡礼類型論の再検討」, 京都民俗7, 1989, 77-87頁。③小田匡保「(書評) John Wilkinson, Joyce Hill and W. F. Ryan eds., *Jerusalem Pilgrimage 1099-1185*」, 史林73-5, 1990, 148-154頁。④小田匡保「(書評) 真野俊和著『日本遊行宗教論』」, 京都民俗9, 1991, 135-143頁。
- 9) Bhardwaj, S. M., *Hindu Places of Pilgrimage in India*, University of California Press, 1973.
- 10) Nolan M. L. and Nolan, S., *Christian Pilgrimage in Modern Western Europe*, The University of North Carolina Press, 1989.
- 11) ①Bhardwaj, S. M. and Rinschede, G. eds., *Pilgrimage in World Religions (Geographia Religionum 4)*, Dietrich Reimer Verlag, 1988. ②Rinschede, G. and Bhardwaj, S. M. eds., *Pilgrimage in the United States (Geographia Religionum 5)*, Dietrich Reimer Verlag, 1990.
- 12) *Orbis Geographicus 1992/93*, Franz Steiner Verlag, 1992, S.175 や本人の談による。
- 13) 論文8と同じ書物に, ジャクソン (R. H. Jackson)・ナップ (J. Knapp) との共著によるモルモン巡礼の論文があるが, 研究アイデアを示唆しただけとの本人の言であるので, 表1からは除外した。
- 14) 日本で, 巡礼をこのような社会地理学的問題意識から論じたものとして, 島津の研究があげられる。島津は, 巡礼地を空間体系, 設立主体(村落間結合)を社会集団とみなしている。前掲注4)。
- 15) Büttner, M., 'Zur Geschichte und Systematik der Religionsgeographie' (Büttner, M. et. al. hrsg., *Grundfragen der Religionsgeographie (Geographia Religionum 1)*, Dietrich Reimer Verlag, 1985), S.13-121.
- 16) たとえば, フィッケラーは, 「宗教と環境との関係は相互作用的な性質のものであり, したがってこれらの研究は, 以下の二つの主要問題に含めることができる。すなわち, 環境(ここでは民族・景観・土地)がいかんにして宗教の形態に作用するののかということと, 逆にまた宗教の形態がいかんにして民族・景観・土地に反作用するののかということである」と述べ, 前者を主に宗教学の課題, 後者を主に宗教地理学の課題とする。①Fickeler, P., 'Grundfragen der Religionsgeographie,' *Erdkunde* 1-4/5/6, 1947, S.121. ビュットナーによれば, このような宗教学者と宗教地理学者の分業を提案したのはトロール (Troll) であり, ①のフィッケラー論文も, トロールが宗教地理学の新しい方向づけについて, フィッケラーに書くようにすすめたものという。前掲注15) S.27. なお, ②岩鼻通明「宗教景観の構造把握への一試論」(京都大学文学部地理学教室編『空間・景観・イメージ』地人書房, 1983)164-165頁は, 宗教と環境の関係論も含めて, 宗教地理学の流れを簡単に整理している。
- 17) ノルマン人の征服以前には, 英語にも, ドイツ語に残る 'Wallen' 系の言葉があったという。
- 18) 信仰圏の規模による巡礼地の分類は, リンシュエデ以外にも行なわれている。たとえば, ノラン・ノランは, 前掲注10) pp.22-28で, 巡礼地の重要度を信仰圏 (catchment basin) の大きさと来訪者数から細かく検討している。前掲注8) ②81-82頁も参照されたい。
- 19) イタリアの巡礼地ロレート (Loreto) についても調査をし, 訳者の手を経てイタリア語で発表され

ているということだが、未見である。また、カナダの巡礼地にも調査の手を広げ、1990年4月のアメリカ地理学会年会で、「カナダ=ケベックにおけるカトリック巡礼地」とのタイトルで発表している。Rinschede, G., 'Catholic Pilgrimage Centers in Quebec, Canada' (*AAG Annual Meeting, Program and Abstracts*, Association of American Geographers, 1990), p.208.

20) 論文2, S.252の注記によると、1976年から調査を始めたようである。

21) *Praxis Geographie* のこの号は「宗教とイデオロギー」の特集になっており、リンシェーデ自身が特集記事編集者となっている。ちなみにこの号で、彼は、論文6の他、「宗教とイデオロギーの空間作用性」(共著)、「地理教育における宗教とイデオロギー—宗教地理学的側面の考察を深めるための一論」, 「宗教とイデオロギー—特集号のための文献案内」を書いている。

22) 'Lourdes - Pilgerstadt' (*Diercke Weltatlas*, Westermann, 1988), S.123.

23) *Geographie heute* のこの号は、「宗教は空間を作る」という特集号であり、前掲注21)と同様リンシェーデが編集にあっている。彼の執筆記事は、論文10の他、「宗教は空間を作る」, 「宗教と環境」, 「テーマ『宗教は空間を作る』のための文献」(共著)である。

24) この論文が掲載された *Geographische Rundschau* の号は、「国際ツーリズム」の特集である。

25) この論文が掲載された *Annals of Tourism Research* の号は、「巡礼とツーリズム」の特集である。ゲスト=エディターは、人類学者のスミス (V. L. Smith) である。

26) ただし、メッカ、メキシコのグアダルーペ (Guadalupe)、カナダのサンタンドボブレ (Sainte-Anne-de-Beaupré)、イタリアのロレートに関するデータが出されているのは新しい。

27) 前掲注2) 87頁。

On the Geographical Studies of Pilgrimage

by Gisbert Rinschede

Über die geographischen Forschungen zum Pilgerphänomen

von Gisbert Rinschede

Masayasu ODA*

Pilgrimage is often dealt with as a theme of geography of religion. One of the geographers grappling with it energetically is Gisbert Rinschede. His papers concerning pilgrimage are as shown in Table 1. They can be classified into five realms: framework and methodology (No.1, 4, 11), Lourdes (No.2, 3, 6), Fátima (No.5, 10), United States (No.8), and religious tourism (No.7, 9). Though there are some differences in nuance by research fields, he clearly emphasizes the aspects of pilgrims as a social group (*Sozialgruppe*), pilgrims' influences on settlement, economy and other phenomena, and activity space (*Aktionsraum*) of pilgrims and pilgrim-tourists. His point of view against a socio-geographical background suggests a new direction for the geographical study of Japanese pilgrimage which has been made almost from the historio-geographical standpoint.

*Department of Geography, Komazawa University, Tokyo.